

この世の光

昔むかし、あるところに、まずしい女がいて、息子が七人ありました。住むところがなかったので、息子たちをつれて国じゅうを歩きまわり、人びとのおめぐみにすがってくらしていました。

ある村まで来たとき、女は、人の住んでいない宮殿きゅうでんがあると聞きました。それは、このあたりでいちばん美しく、りっぱなたものなのですが、こわいものが出るので人が住まなくなったということでした。

女は、村長のところに行つて、その宮殿とに泊とまらせてもらえないかとたのみました。村長は、ひどく身ぶるいして、いいました。

「とんでもない。あの宮殿には、夜になると、くさりのガチャガチャいう音や、ほねのガタガタ鳴る音がして、化ばけものが出るんだぞ」

けれども、女は、つかれたからだをどこに横たえればいいか分からなかったので、「わたしは、まずしくて、うしなう物は何もないから、何が起ころうともかまいやしません」と答えました。

こうして、女と息子たちは、宮殿に入つていきました。台所のかまどに火をつけてしばらくすると、くさりのガチャガチャいう音や、ほねがガタガタ鳴ったりきしんだりする音が聞こえはじめました。音はどんどん大きくなって、しまいに宮殿全体がゆれはじめました。それから、声が聞こえてきました。

「明かりをつけてくれ。明かりをつけてくれ」

女は、立って行って、かまどの火の中から先のもえているつえを一本取りだし、いちばん上の息子にわたしていました。

「明かりをほしいといってるから、こわがらないで、これを持っていっておやり」すると、ほかの六人の息子たちも、兄さんひとりに行かせないで、兄さんの後からぞろぞろついていきました。

みんなが、声の聞こえてきたほうへ歩いていくと、大広間にやって来ました。

大広間のまんなかに、大きなひじかけいすがおいてあり、ひとりの老人ろうじんがすわっていました。老人の長い濃こいひげは、床ゆかにとどきそうでした。老人は、手に、文字がたてに

書いてあるぶあつい本を持っていました。

まわりのかべには、ねこやへびや、見たこともない動物など、たくさん絵がかけられてあり、いやらしいしかめつつらをした悪魔あくまの絵もありました。けれども、息子たちはこわがらないで、大広間をつつ切って、いすのところまで行きました。

いちばん上の息子は、つえの明かりをかかげて老人のそばに立ちました。老人は、むさぼるように本を読みはじめました。

しばらくすると、老人は、本をぜんぶ読みおえ、ため息をつきながら本をとじました。そして、いいました。

「わたしは、生きているとき、この宮殿の主だった。金持ちいじょうに金持ちだったが、この聖なる本を読む義務ぎむをおこたつたために、死んでから読まねばならなかった。だが、わたしは、夜のあいだししか地下の世界からあがってくることをゆるしてもらえない。だから、本を読むための、この世の光がなかったのだ。

わたしは、七年間というもの、毎日毎日『明かりをつけてくれ』とさけびつづけたが、だれもこたえてくれなかった。だが、いま、おまえたちのおかげで、義務をはたすことができた。これでわたしは、天上の世界にのぼっていくことができる。もう、この世の光をもとめなくてもよくなった。

わたしは、おまえたちの親切にむくいたいと思う。かまどのタイルの下に黄金のつまつたかめが七つうめられている。それをおまえたちにやろう。ああ、わたしは、いま、安心してこの宮殿から出ていくことができる」

そして、老人は消えました。

七人の息子たちは台所にもどり、母親にすべてを話しました。母親は、すぐに息子たちにかまどのタイルの下をほらせました。すると、黄金のつまつたかめが七つ出てきました。

こうして、女と息子たちは、このあたりにくらべる者のないほどの金持ちになり、宮殿の中にこわいものが出ることもなくなりました。

カタクリヒト   カタクラハト

おとぎ話はおしまい

カタクラハト   カタクリヒト

光のおとぎ話

出典 『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話  
原話 『世界の民話13』竹原威滋訳／ぎょうせい